HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	工業集積地域における児童・生徒の生活と親の意識：補論 「学校的成功」と親の教育戦略
Author(s)	小内, 透; 古久保, さくら; 小野寺, 理佳 他
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 17, 101-118
Issue Date	1999-06
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/22635
Type	departmental bulletin paper
File Information	17_P101-118.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

補　論　「学校的成功」と親の教育戦略

第１節　課題と方法

子どもの生活の場は多様である。家庭、学校、地域社会、仲間集団など、子どもは多様な場で生きている。そうした生活の場には、それぞれ固有の目的や論理がある。しかし、子どもはそうした目的や論理だけに左右されて生きているのではない。そうした目的や論理を、自身の解釈の仕方で再構成し、その結果に基づいてそれぞれの生活の場を生きている。一人一人の子どもには、その子どもなりの生き方がある。ならば、学校という場での成功のあり方は一つしかないとは、いえないだろう。子どもたちが学校で生活する様々なやり方の中にそれぞれの「成功」があるとすべきではないか。学業成績という単一の指標で語られがちな学校的成功ではあるが、そのありかたは本来多様なものではないだろうか。この、多様な「成功」のあり方を明らかにするのが本稿の課題である。

一方、高学歴、高収入など、階層が上位の親の子どもには、学校での成績が上位にくる者が多いことや、学力偏差値の高い学校に属している子どもの親には上位の階層の者が多いことはよく知られている。学校的成功のひとつのかたちであろう成績と、親の属性との間には関係があることは広く知られている。学歴、収入、職業の違いなど、経済的、文化的差異としての階層が、親の生き方の間の差異をもたらし、その生き方の差異は、子どもに対する教育戦略の違いとして表れる。その親の教育戦略をみながら子どもは生活し、自身で再構成しているのなら、親の教育戦略と子どもの学校的成功のパターンには関わりがでてくるだろう。この、親子の連関のプロセスを明らかにすることも本稿の目的の一つである。

今回データとして用いたのは、1996年9月に北関東の両毛工業地域の中心都市である太田市において行われた大量のアンケート調査結果である。市内9小学校、9中学校の、小学３年生、５年生、中学２年生の生徒およびその親を対象とし、3047件の回答を得ている。大量のデータを得たことより、今回用いたクラスター分析、数量化Ⅲ類といった多変量解析が可能になった。また、子どもの回答用紙と親の回答用紙との間にナンバリングによって一対一の対応付けを行っているため、一件づつの回答が子どもと親のペアになっており、「この親にしてこの子あり」という分析ができるとともに、学年段階による比較が可能となっている。

今回用いた統計的手法は、林の数量化Ⅲ類、クラスター分析である。これらの手法は、複数要因間の関係を明らかにするのに適した方法である。データ処理はコンピュータを利用して行われており、これらの多変量解析は統計ソフトであるSpss for Windows 7.5.1Jを利用している。

第２節　「学校的成功」の尺度

まず、本稿の課題の一つである、多様な「成功」のあり方を明らかにしてみよう。今回用いた手法は、林の数量化Ⅲ類である。林の数量化Ⅲ類は、文部省統計数理研究所の林知己夫氏らによって開発された多変量解析の手法の一つで、回答の傾向から内容の似た質問項目および似た回答者同士を集める分析方法である。

価値意識のあり方は目に見えるものではないし、行動する本人に明確に意識されているというものでもない。その人の行動の様子、状況への反応の仕方を観察することにより、それを貫く筋、規則性、一貫性として、事後的に類推されるものである。今回は、学校生活に関する質問への回答の反応を貫いている筋を探し出すことになる。数量化Ⅲ類はこれに適した手法である。こうして得られた筋、規則性・一貫性（数量化Ⅲ類では軸と表現する）を分析の対象としていく。

(1)「学校的成功」の３つの尺度

ここでは、子どもたちが学校で生活する様々なやり方の中にそれぞれの「成功」があると考え、勉強の自己評価、スポーツの自己評価、児童会・生徒会活動、役員経験、学校で楽しいこと、学校での悩み、といった子どもたちの学校生活での行動や意識を示す6項目の質問をもとにして、数量化理論Ⅲ類により「学校的成功」をはかる尺度を析出した。用いた質問項目は、学校成績の評価（成績、スポーツ）、子どもの学校に対する認識（児童会・生徒会活動、学校で楽しいこと、学校での悩み）、他者からの承認のあり方（役員経験）を示す指標となる。その結果、3つの尺度を得ることができた。表2-1-1はその3つの尺度がどのようなものであるかを解釈するのに役立つカテゴリー・ウエイトを示すものである。

最初に、最も有効な基準である第１尺度についてみてみよう（図2-1-1）。これらのカテゴリー構成から、第1尺度は、学校で評価される勉強やスポーツが得意であると認識し、学校で楽しいことが多く、他者からも評価されている子どもか、反対に、勉強やスポーツが苦手と認識し、学校で楽しいことが少ない子どもかを区別する尺度と見ることができる。したがって第1尺度を学校での成績の良し悪しをあらわす「成功―不成功」尺度と名づけることにする。

次に、第1尺度に次いで有効な第２尺度についてみてみよう（図2-1-2）。ここで興味深いのは、成績に対する自己評価のあり方についてである。表2-1-1によれば、第１軸では、プラスの方から「よくできる―まあまあできる―あまりできない―まったくできない」という順番になっている。それに対して第２軸では、プラスの方から「まあまあできる―よくできる―あまりできない―まったくできない」という順番になっている。

成績の指標として自己評価を用いた場合、それは客観的な成績のよさをあらわすものではなく、むしろ当人の成績に対する自己肯定感をあらわすものとしてとらえる考え方もある。多少成績が悪くても満足し、成績に対し自己肯定的な評価をする者もいれば、たとえ成績が良くても必ずしも成績に対して自己肯定的な評価をしない者もいるからである。この点を考慮し、今回の分析では、成績の指標として自己評価を用いた場合、「よくできる―まあまあできる―あまりできない―まったくできない」といった並び方は成績の客観的評価をあらわしており、「まあまあできる―よくできる―あまりできない―まったくできない」といった並び方は、本人の自己肯定感をあらわしたものであると考えた。

表 2-1-1

成功―不成功	ｶﾃｺﾞﾘｰｳｪｲﾄ	満足―不満足	ｶﾃｺﾞﾘｰｳｪｲﾄ	関わる―かかわらない	ｶﾃｺﾞﾘｰｳｪｲﾄ
勉強 よくできる	2.769568	悩みの有 ない	1.092658	勉強 まったくできない	6.438874
児童会 熱心にやっている	2.486033	学楽個改 4	1.072413	スポーツ とても苦手	5.051637
学楽個改 7以上	1.885449	勉強 まあまあできる	0.959952	勉強 よくできる	2.134053
役員経験 経験	1.598402	学楽個改 3	0.932700	学楽個改 1以下	1.805715
スポーツ 得意	1.497129	児童会 やっていない	0.908886	児童会 やっていない	1.109023
学楽個改 6	1.057821	スポーツ あまり得意でない	0.512238	スポーツ 得意	0.708020
学楽個改 5	0.638454	役員経験 経験なし	0.435980	悩みの有 ない	0.577858
悩みの有 ない	0.427005	学楽個改 2	0.100246	児童会 熱心にやっている	0.467438
勉強 まあまあできる	0.417861	スポーツ 得意	0.056723	学楽個改 5	0.114200
学楽個改 4	0.027640	スポーツ まあまあ得意	0.056437	役員経験 経験なし	0.082191
児童会 まあやっている	-0.104860	学楽個改 5	0.038585	学楽個改 7以上	0.078741
スポーツ まあまあ得意	-0.222814	児童会 まあやっている	-0.420653	学楽個改 4	0.010287
学楽個改 3	-0.580728	勉強 よくできる	-0.499689	学楽個改 3	-0.023556
悩みの有 ある	-0.603895	学楽個改 1以下	-0.796726	勉強 まあまあできる	-0.055969
役員経験 経験なし	-0.695067	学楽個改 6	-0.827253	役員経験 経験	-0.181068
児童会 やっていない	-0.768510	役員経験 経験	-0.941032	学楽個改 2	-0.303021
学楽個改 2	-0.861951	勉強 あまりできない	-1.227189	スポーツ あまり得意でない	-0.642185
スポーツ あまり得意でない	-0.950626	悩みの有 ある	-1.548665	スポーツ まあまあ得意	-0.812939
勉強 あまりできない	-1.244966	児童会 熱心にやっている	-1.563864	悩みの有 ある	-0.840986
学楽個改 1以下	-1.771157	学楽個改 7以上	-2.403283	児童会 まあやっている	-1.004554
勉強 まったくできない	-2.322416	スポーツ とても苦手	-2.952936	勉強 あまりできない	-1.064411
スポーツ とても苦手	-2.383035	勉強 まったくできない	-4.141272	学楽個改 6	-1.523201

図 2-1-1

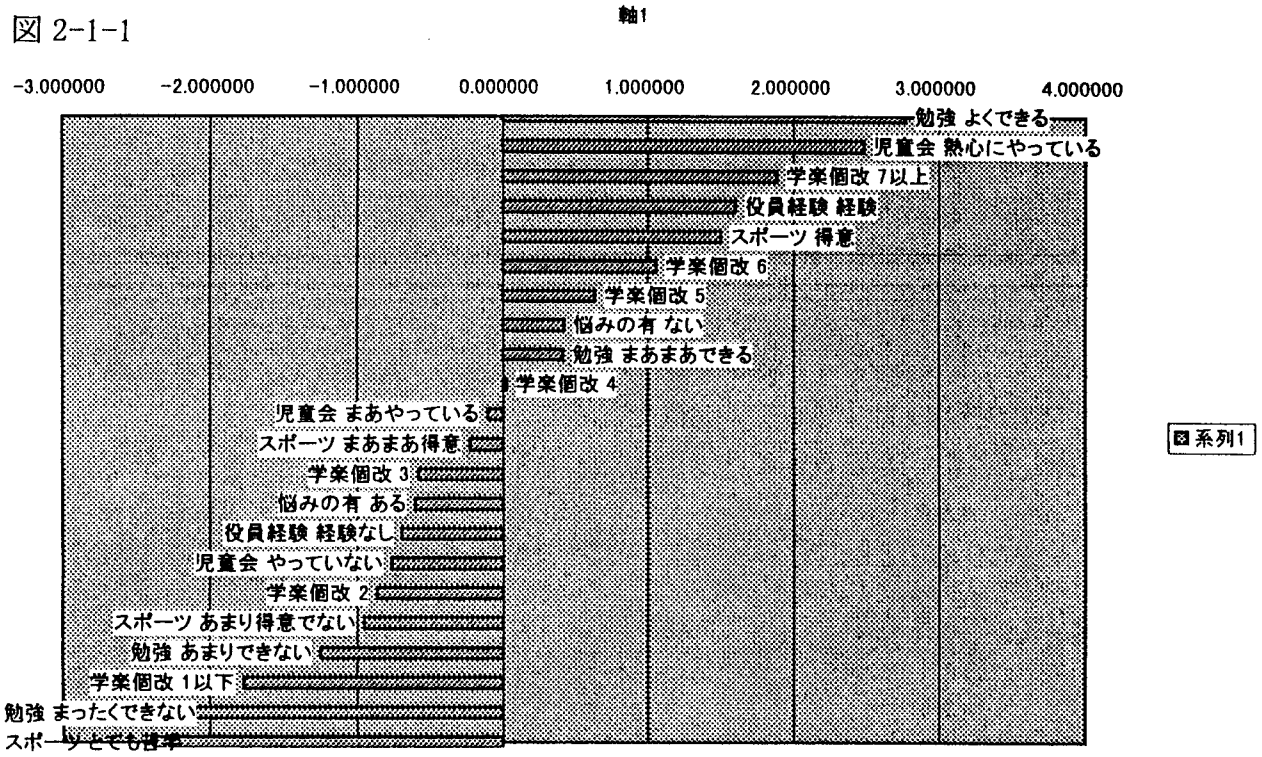
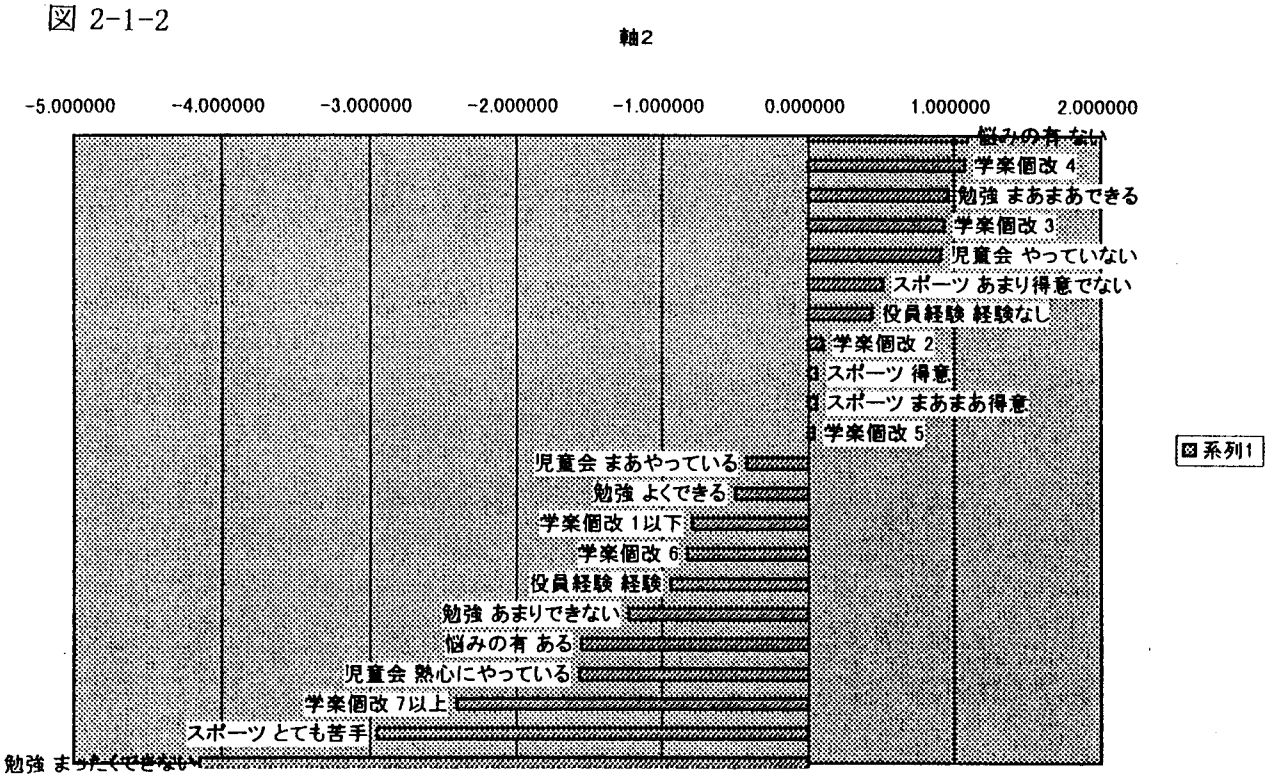

軸1
-3.000000
-2.000000
-1.000000
0.000000
1.000000
2.000000
3.000000
4.000000
勉強 よくできる
児童会 熱心にやっている
学楽個改 7以上
役員経験 経験
スポーツ 得意
学楽個改 6
学楽個改 5
悩みの有 ない
勉強 まあまあできる
学楽個改 4
児童会 まあやっている
スポーツ まあまあ得意
学楽個改 3
悩みの有 ある
役員経験 経験なし
児童会 やっていない
学楽個改 2
スポーツ あまり得意でない
勉強 あまりできない
学楽個改 1以下
勉強 まったくできない
スポーツ とても苦手
系列1

図 2-1-2


軸2
-5.000000
-4.000000
-3.000000
-2.000000
-1.000000
0.000000
1.000000
2.000000
悩みの有 ない
学楽個改 4
勉強 まあまあできる
学楽個改 3
児童会 やっていない
スポーツ あまり得意でない
役員経験 経験なし
学楽個改 2
スポーツ 得意
スポーツ まあまあ得意
学楽個改 5
児童会 まあやっている
勉強 よくできる
学楽個改 1以下
学楽個改 6
役員経験 経験
勉強 あまりできない
悩みの有 ある
児童会 熱心にやっている
学楽個改 7以上
スポーツ とても苦手
勉強 まったくできない
系列1

この解釈の妥当性を確かめるため、「学校で楽しいこと」の設問に対して「好きな授業」をあげた者・あげなかった者、また、学校での悩みごとの設問に対して「成績」をあげた者・あげなかった者、計4グループのサンプルスコア平均を、第１軸をＸ軸、第２軸をＹ軸にした散布図で確認した（図2-1-3）。その結果、第１象限には「学校での悩み：成績」をあげなかったグループが、第２象限には「学校で楽しいこと：好きな授業」をあげなかったグループが、第３象限には「学校での悩み：成績」をあげたグループが、第４象限には「学校で楽しいこと：好きな授業」をあげたグループが配置された。

ここで問題となる第２軸のサンプルスコア平均は、プラスから、「学校での悩み：成績」をあげなかったグループ→「学校で楽しいこと：好きな授業」をあげなかったグループ→「学校で楽しいこと：好きな授業」をあげたグループ→「学校での悩み：成績」をあげたグループというような配置となっている。学校での悩みとして「成績」をあげなかったグループのサンプルスコア平均がもっとも高く、「成績」を悩みとしてあげたグループのそれがもっとも低くなっている。ここから、第２軸で現れた並び方が自己肯定感の高さをあらわしているということがうかがえる。

よって、第２尺度を本人が自分のあり方をうけいれているかどうかをあらわす、「満足―不満足」尺度とする。

最後に、第３尺度についてみてみる（図2-1-4）。第３尺度は、規範あるいは要求として学校を重視し関わる姿勢をもつか、または学校とは関係無くマイペースでいくかを区別する尺度と見ることができる。よって、第３尺度を、学校に関わることができるかどうかをあらわす、「関わる―関わらない」尺度とする。

(2)「学校的成功」の３つの尺度と学年

以上のように、第１に「成功―不成功」、第２に「満足―不満足」、第３に「関わる―関わらない」という尺度が、子どもの学校生活を区別するのに有効な基準だということがわかった。この3つの尺度と、学年との関係を確認しておく。図2-2-1、表2-2-1は、学年ごとのサンプルスコア平均値である。

「成功―不成功」尺度では、小５で一番満足度が増加し、中２では下がっている。小３ではまだ自分が成功しているかどうかは意識にのぼらず、中２では否定的に意識せざるをえない状況にあると考えられる。この背景には絶対評価、相対評価という学校での成績評価の違いもあるだろう。「満足―不満足」尺度、「関わる―関わらない」尺度では、高学年になるにしたがって不満足、関わらないとする傾向にあることがわかる。各尺度とも学年で有意差があり、学年間の差が一番大きいのは「満足―不満足」尺度である。

図 2-1-3

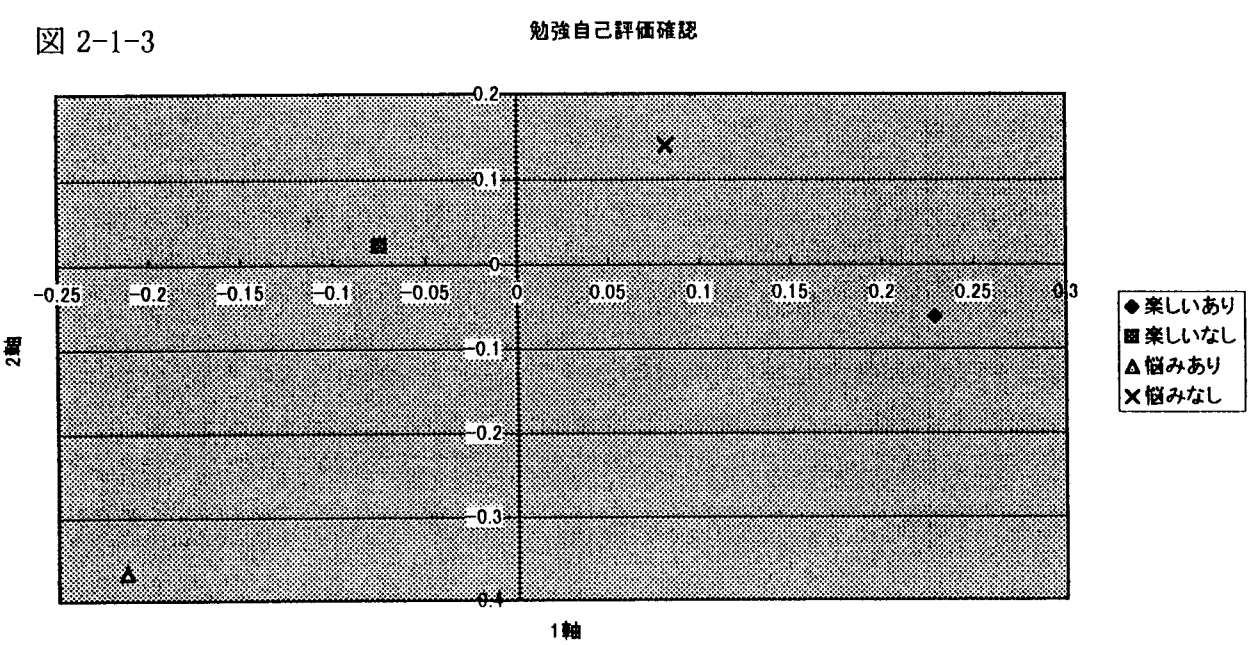


図 2-1-4

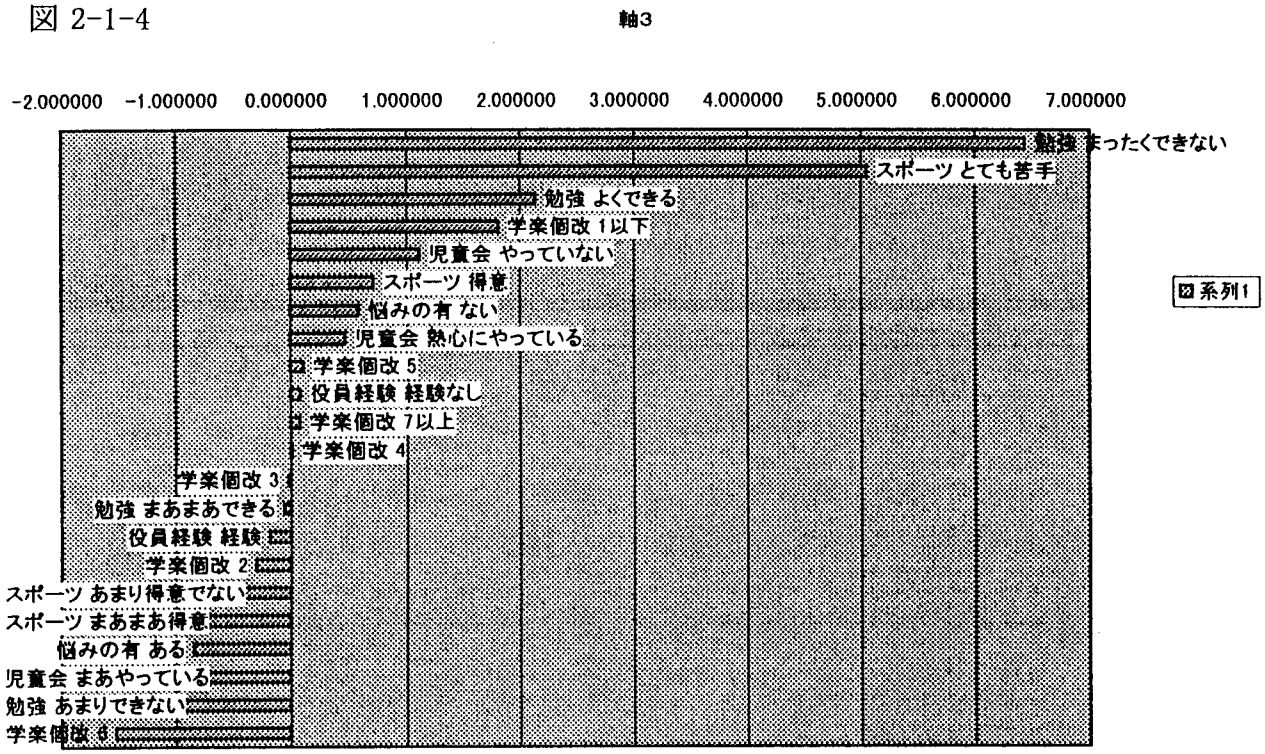


図 2-2-1

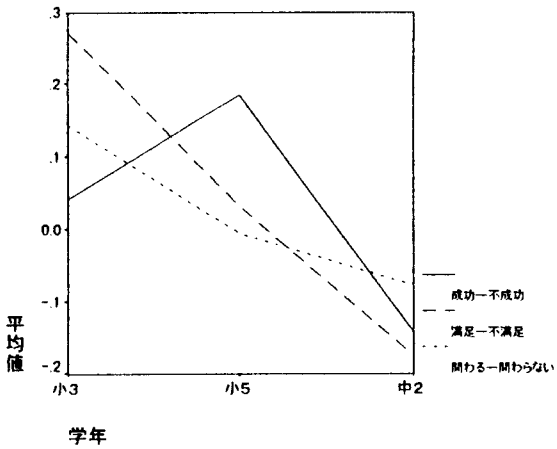


表 2-2-1

平均値

	学年			
	小3	小5	中2	合計
成功—不成功	4.268E-02	.18429158	-.1426696	4.853E-04
満足—不満足	.27166925	3.159E-02	-.1749918	6.533E-04
関わる—関わらない	.14319775	-5.44E-03	-7.73E-02	6.181E-04

第３節　親の教育戦略――親子接触の類型

親の教育戦略には、見える戦略、見えない戦略の２つがあると考えられる。見える戦略とは、塾や習い事へ通わせるなど教育投資としてあらわれるものであり、見えない戦略とは、意識的なものではなく、親が子どもと家庭で生活していく様々なやり方の中にあらわれてくる筋道のことである。塾に通わせるなどの見える戦略は見えない戦略に支えられていることもあり、本稿であつかう教育戦略は後者に限定する。親と子の接触の仕方は、日常生活の様々なやり方を代表する指標となりうるであろう。

ここで用いた質問項目は、勉強を見る、一緒に遊ぶ、朝食を一緒に食べる、夕食を一緒に食べる、テストの結果を見る、テストのある日を知っている、学校の出来事をきく、将来について話し合うの8項目である。

(1)親子接触の類型

まず、ここで用いた質問項目の単純集計結果を見ておく（図3-1-1～図3-1-16）。ここで分析の対象となる8項目は、子どもとの関係は良好か（一緒に遊ぶ、学校の出来事をきく）、日常的に子どもに接触しているか（朝食を一緒に食べる、夕食を一緒に食べる）、積極的に子どもの教育に関わろうとしているか（勉強を見る、テストのある日を知っている、将来について話し合う）、子どもの成績に関心があるか（テストの結果を見る）、をはかる指標である。日常的に子どもに接触しているのは母親であり、また、その他の項目でも母親の方が子どもに関わる傾向にあることが見て取れる。

次に、この質問項目をもとに、回答パターンが似ているもの同士で類型化する方法であるクラスター分析を行った。回答パターンの傾向から、ここでは4類型を得ることができた。以下は各類型の特徴である。表3-1-1は各類型での回答の傾向である。

親子接触類型１―母接触型

母がすべての項目で子どもと接触しており、父は一緒に遊ぶだけである。他の類型では父親の参加が半数をこえる項目に対してもこの類型の父親は非協力的であり、一緒に遊ぶことだけはするという「おいしい」ところをおさえているのがめだつ。母親が子育てを担っていることがわかる。

親子接触類型２―放任型

父母ともに、勉強の相手や、一緒に遊ぶこと、将来の話はしない。朝食の相手、夕食の相手はするが、これは他類型でも行っていることであり、日常生活をともにおくっていること以上の意味をもたない。テストの結果を知る母、学校の出来事をきく母は多いが、この項目も他類型でも過半数が参加しているため特徴にはならない。

親子接触類型３―結果重視型

勉強の相手や、一緒に遊びはしないが、学校の出来事を聞き将来の話もする。積極的に子どもに関わろうとしないが、テストの結果はおさえている。

親子接触類型４―交流型

父がテストのある日を知らない以外は、父母ともにすべての項目で子どもと接触している。結果重視型と違う点は、勉強の面倒を見、一緒に遊びもしており、子どもと関わっていることである。

以上得られた４類型の解釈が妥当かどうか確認するため、類型化に用いた質問項目との間でクロス集計を行った（表3-1-2～表3-1-17）。すべての項目で0.01レベルで有意差がみられており、ここで得られた４類型化が有効であることがわかる。

図 3-1-1　父勉強の面倒

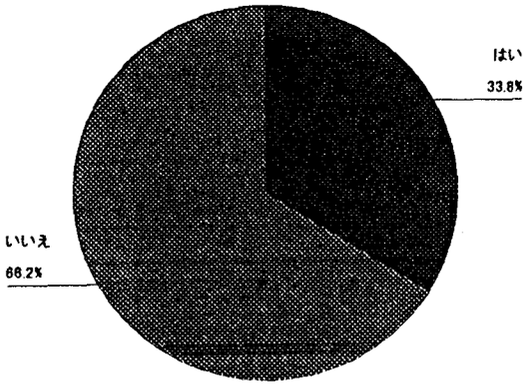


図 3-1-2　母勉強の面倒

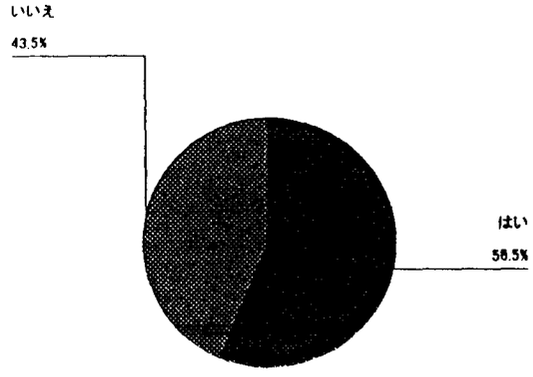


図 3-1-3　父一緒に遊ぶ

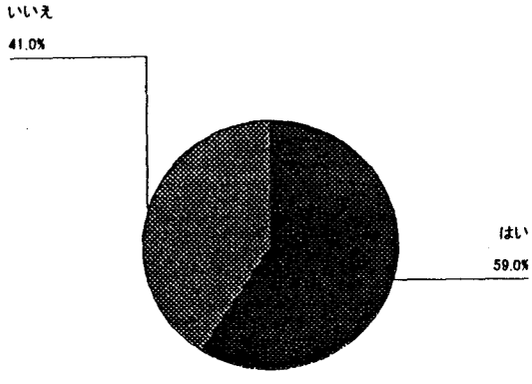


図 3-1-4　母一緒に遊ぶ

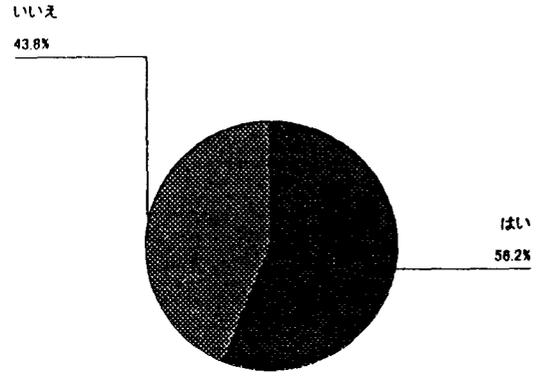


図 3-1-5　父朝食の相手

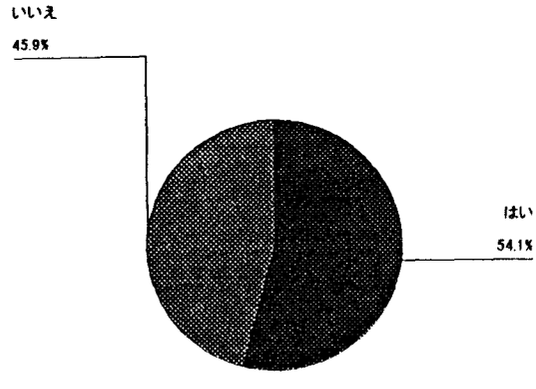


図 3-1-6　母朝食の相手

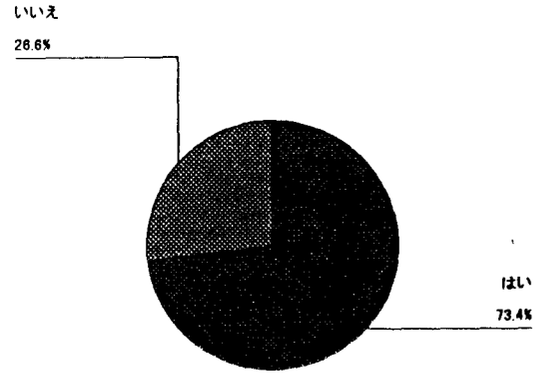


図 3-1-7　父夕食の相手

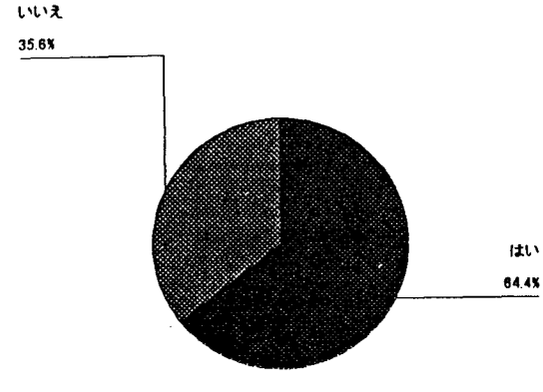


図 3-1-8　母夕食の相手

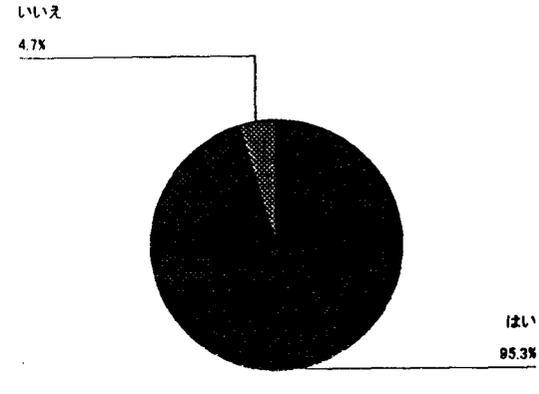


図 3-1-9　父テスト見る

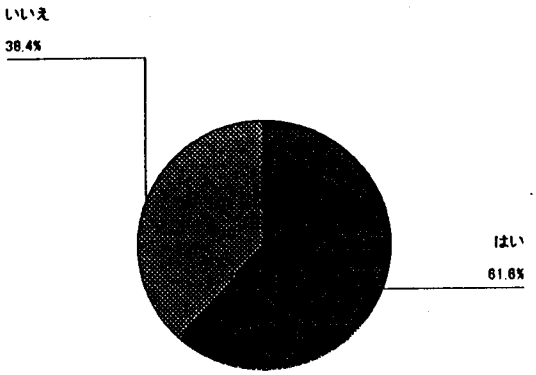


図 3-1-10　母テスト見る

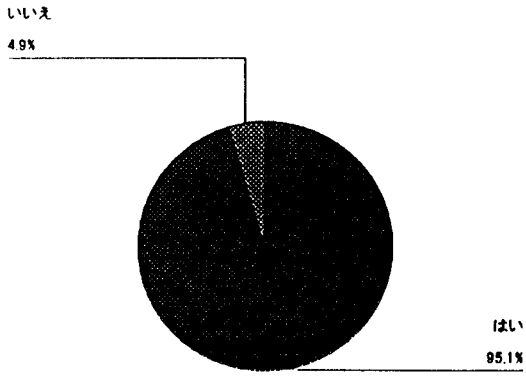


図 3-1-11　父テスト知る

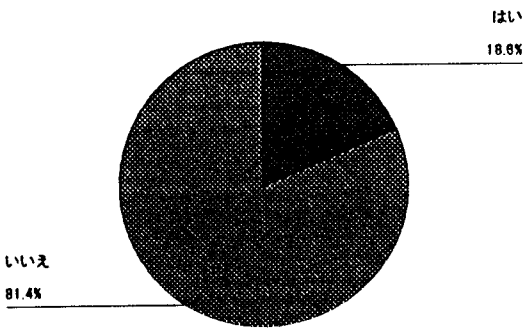


図 3-1-12　母テスト知る

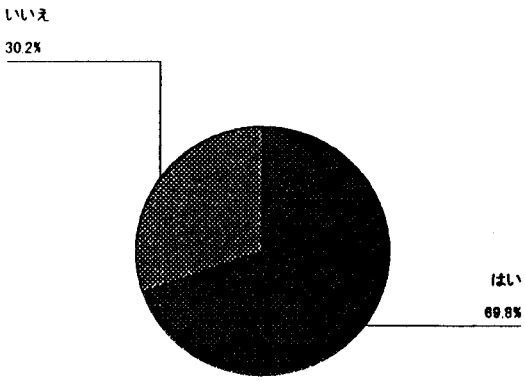


図 3-1-13　父学校の話

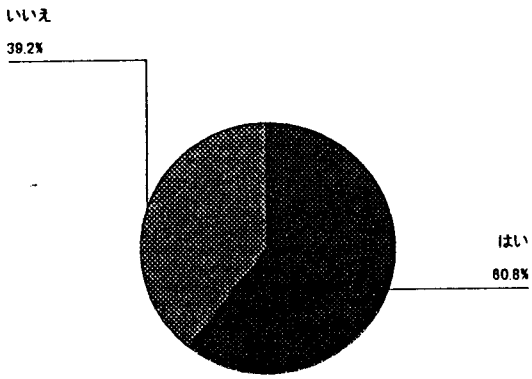


図 3-1-14　母学校の話

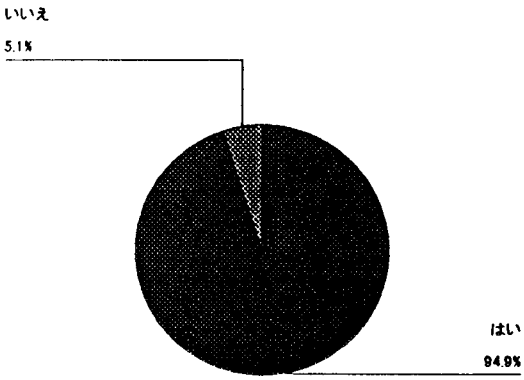


図 3-1-15　父将来の話

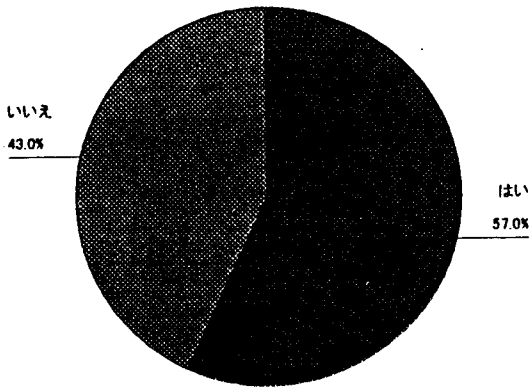


図 3-1-16　母将来の話

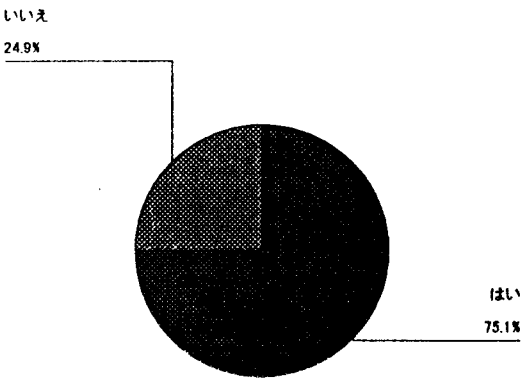


表 3-1-1　最終クラスタ中心（クラスタ回答の傾向　1はい　2いいえ）

	親子接触類型			
	母接触型	放任型	結果重視型	交流型
父勉強の面倒	2	2	2	1
母勉強の面倒	1	2	2	1
父一緒に遊ぶ	1	2	2	1
母一緒に遊ぶ	1	2	2	1
父朝食の相手	2	1	2	1
母朝食の相手	1	1	1	1
父夕食の相手	2	1	1	1
母夕食の相手	1	1	1	1
父ﾃｽﾄ見る	2	1	1	1
母ﾃｽﾄ見る	1	1	1	1
父ﾃｽﾄ知る	2	2	2	2
母ﾃｽﾄ知る	1	1	1	1
父学校の話	2	2	1	1
母学校の話	1	1	1	1
父将来の話	2	2	1	1
母将来の話	1	2	1	1

表 3-1-2　父勉強の面倒 と 親子接触類型 のｸﾛｽ表

父勉強の面倒 の %

		親子接触類型				合計
		母接触型	放任型	結果重視型	交流型	
父勉強の面倒	はい	8.3%	11.6%	6.5%	73.6%	100.0%
	いいえ	29.1%	18.3%	34.3%	18.3%	100.0%
合計		22.2%	16.1%	25.0%	36.8%	100.0%

表 3-1-3　母勉強の面倒 と 親子接触類型 のｸﾛｽ表

母勉強の面倒 の %

		親子接触類型				合計
		母接触型	放任型	結果重視型	交流型	
母勉強の面倒	はい	33.0%	11.8%	5.5%	49.7%	100.0%
	いいえ	8.1%	21.6%	50.4%	19.9%	100.0%
合計		22.2%	16.1%	25.0%	36.8%	100.0%

表 3-1-4　父一緒に遊ぶ と 親子接触類型 のｸﾛｽ表

父一緒に遊ぶ の %

		親子接触類型				合計
		母接触型	放任型	結果重視型	交流型	
父一緒に遊ぶ	はい	23.9%	10.5%	6.5%	59.1%	100.0%
	いいえ	19.8%	23.9%	50.8%	5.4%	100.0%
合計		22.2%	16.1%	25.0%	36.8%	100.0%

表 3-1-5　母一緒に遊ぶ と 親子接触類型 のｸﾛｽ表

母一緒に遊ぶ の %

		親子接触類型				合計
		母接触型	放任型	結果重視型	交流型	
母一緒に遊ぶ	はい	32.4%	5.5%	5.3%	56.8%	100.0%
	いいえ	9.2%	29.5%	50.0%	11.3%	100.0%
合計		22.2%	16.1%	25.0%	36.8%	100.0%

表 3-1-6　父夕食の相手 と 親子接触類型 のｸﾛｽ表

父夕食の相手 の %

		親子接触類型				合計
		母接触型	放任型	結果重視型	交流型	
父夕食の相手	はい	17.1%	14.2%	24.0%	44.7%	100.0%
	いいえ	31.3%	19.3%	26.8%	22.6%	100.0%
合計		22.2%	16.1%	25.0%	36.8%	100.0%

表 3-1-7　母夕食の相手 と 親子接触類型 のｸﾛｽ表

母夕食の相手 の %

		親子接触類型				合計
		母接触型	放任型	結果重視型	交流型	
母夕食の相手	はい	22.3%	15.3%	24.7%	37.7%	100.0%
	いいえ	20.0%	31.7%	31.7%	16.7%	100.0%
合計		22.2%	16.1%	25.0%	36.8%	100.0%

表 3-1-8　父朝食の相手 と 親子接触類型 のｸﾛｽ表

父朝食の相手 の %

		親子接触類型				合計
		母接触型	放任型	結果重視型	交流型	
父朝食の相手	はい	14.3%	16.3%	21.1%	48.4%	100.0%
	いいえ	31.4%	15.8%	29.5%	23.3%	100.0%
合計		22.2%	16.1%	25.0%	36.8%	100.0%

表 3-1-9　母朝食の相手 と 親子接触類型 のｸﾛｽ表

母朝食の相手 の %

		親子接触類型				合計
		母接触型	放任型	結果重視型	交流型	
母朝食の相手	はい	21.4%	13.5%	23.5%	41.6%	100.0%
	いいえ	24.4%	23.4%	29.1%	23.2%	100.0%
合計		22.2%	16.1%	25.0%	36.8%	100.0%

表 3-1-10　父ﾃｽﾄ見る と 親子接触類型 のｸﾛｽ表

父ﾃｽﾄ見る の %

		親子接触類型				合計
		母接触型	放任型	結果重視型	交流型	
父ﾃｽﾄ見る	はい	7.8%	13.8%	26.5%	51.9%	100.0%
	いいえ	45.3%	19.7%	22.6%	12.4%	100.0%
合計		22.2%	16.1%	25.0%	36.8%	100.0%

表 3-1-11　母ﾃｽﾄ見る と 親子接触類型 のｸﾛｽ表

母ﾃｽﾄ見る の %

		親子接触類型				合計
		母接触型	放任型	結果重視型	交流型	
母ﾃｽﾄ見る	はい	22.3%	14.7%	24.9%	38.0%	100.0%
	いいえ	19.6%	46.4%	25.9%	8.0%	100.0%
合計		22.2%	16.1%	25.0%	36.8%	100.0%

表 3-1-12　父ﾃｽﾄ知る と 親子接触類型 のｸﾛｽ表

父ﾃｽﾄ知る の %

		親子接触類型				合計
		母接触型	放任型	結果重視型	交流型	
父ﾃｽﾄ知る	はい	2.3%	8.6%	37.4%	51.6%	100.0%
	いいえ	26.8%	17.8%	22.1%	33.3%	100.0%
合計		22.2%	16.1%	25.0%	36.8%	100.0%

表 3-1-13　母ﾃｽﾄ知る と 親子接触類型 のｸﾛｽ表

母ﾃｽﾄ知る の %

		親子接触類型				合計
		母接触型	放任型	結果重視型	交流型	
母ﾃｽﾄ知る	はい	18.7%	12.2%	31.5%	37.6%	100.0%
	いいえ	30.4%	25.3%	9.6%	34.8%	100.0%
合計		22.2%	16.1%	25.0%	36.8%	100.0%

表 3-1-14　父学校の話 と 親子接触類型 のｸﾛｽ表

父学校の話 の %

		親子接触類型				合計
		母接触型	放任型	結果重視型	交流型	
父学校の話	はい	12.4%	10.8%	20.9%	55.9%	100.0%
	いいえ	37.2%	24.2%	31.3%	7.3%	100.0%
合計		22.2%	16.1%	25.0%	36.8%	100.0%

表 3-1-15　母学校の話 と 親子接触類型 のｸﾛｽ表

母学校の話 の %

		親子接触類型				合計
		母接触型	放任型	結果重視型	交流型	
母学校の話	はい	22.9%	13.6%	25.0%	38.5%	100.0%
	いいえ	7.7%	63.8%	25.4%	3.1%	100.0%
合計		22.2%	16.1%	25.0%	36.8%	100.0%

表 3-1-16　父将来の話 と 親子接触類型 のｸﾛｽ表

父将来の話 の %

		親子接触類型				合計
		母接触型	放任型	結果重視型	交流型	
父将来の話	はい	13.2%	1.2%	32.5%	53.1%	100.0%
	いいえ	33.9%	35.5%	15.2%	15.5%	100.0%
合計		22.2%	16.1%	25.0%	36.8%	100.0%

表 3-1-17　母将来の話 と 親子接触類型 のｸﾛｽ表

母将来の話 の %

		親子接触類型				合計
		母接触型	放任型	結果重視型	交流型	
母将来の話	はい	23.3%	.8%	33.0%	42.9%	100.0%
	いいえ	18.9%	62.1%	.9%	18.1%	100.0%
合計		22.2%	16.1%	25.0%	36.8%	100.0%

親子接触類型１―母接触型は全体の22.2％を占める。すべての項目において、父よりも母がはいと答える傾向にあり、母親が子育てを担っていることがわかる。この類型では、父が一緒に遊ぶの項目において、はいと答える傾向にあった。類型間で比較してみると、はいと答える父が全体に占める比率は、この類型の父親が全ケースに占める構成比そのものとあまりかわらないことがわかる。しかし、この類型内ではいと答える父親の比率が全ケースに占める構成比を超えているのはこの項目だけであり、類型の特徴として成り立つことがわかる。

親子接触類型２―放任型は全体の16.1％を占める。クロス集計の結果、この類型が際立ったのは、将来の話をする父母の少なさである。勉強の相手や、一緒に遊ぶ母も少ないことがわかる。その一方で日常的な接触はしており、子どもの教育に対する姿勢は消極的であることがわかる。

親子接触類型３―結果重視型は全体の25.0％を占める。テストの結果を知る項目で、はいと答える者の割合が、全体のなかでの類型の構成比と比較すると、父母ともに多いことがわかる。また、将来の話をするに対していいえと答える者の割合が少ないのも特徴となる。この類型は、日常的な接触を除くその他の項目でいいえと答える者が多い。そのことを考えると、テストの結果が即将来の話に結びつくという姿が予想できる。

親子接触類型４―交流型は全体の36.8％をしめる。テストの結果を知っている父の項目において、この類型はいいえと答える傾向にあった。しかし、類型間で比較してみると、はいと答える者の中で交流型は51.6％を占めている。全体的にテストの結果を知らない傾向にあるなかにおいて、知っている父の中の半数を占めているということは、積極的に子どもと関わると判断した交流型の特徴が妥当であるものと考えられる。

(2)親子接触類型と属性

それでは、これらの類型と学年、親の属性について見てみよう。

表3-2-1は親子接触類型の学年ごとの分布状況である。まず、放任型が学年を問わず一定の割合を占めていることがわかる。中２に注目してみてみると、結果重視型の占める割合が小学校段階に比べ増え、母接触型、交流型が減ることがわかる。これは、高校受験を控えているため成績を気にする親が増えるということと、自我の目覚めにより親との接触が少なくなるということであろう。

表3-2-2～表3-2-6は、親の学歴、職業、収入ごとの、親子接触類型の分布状況である。

父母ともに、中学卒では結果重視型に、高校卒では放任型に、専門学校卒以上の高学歴層では交流型にシフトしていることがわかる（表3-2-2～表3-2-3）。職業では、母が無職の場合は母接触型にシフトしているが、その他の場合父の職種の影響が強い。専門・技術職、管理職などホワイトカラー層では交流型に、販売・サービス業では母接触型に、工員・運輸職・保安職は放任型にシフトしている（表3-2-4～表3-2-5）。また年収で見ると、年収200万円未満の絶対的低収入層は放任型と交流型に二極分化している。200万～600万円未満の、いわば相対的低収入層では母接触型に、600万～1000万円未満の層で結果重視型にシフトしていることがわかる。また、2000万円以上の高収入層では放任型が減り、交流型、母接触型の割合が増えているが、ここからは子どもの教育に手をかけられる裕福な専業主婦像がうかがわれる（表3-2-6）。

以上から、放任型と交流型に二極分化する絶対的低収入層、母接触型にシフトする相対的低収入層、交流型にシフトしている高学歴高収入層、結果重視型にシフトする低学歴層というように、親子接触類型の背景には、学歴、職業、収入といった社会的現実の差があることが明らかになった。

表 3-2-1　　学年 と 親子接触類型 のクロス表

			親子接触類型				合計
			母接触型	放任型	結果重視型	交流型	
度数	学年	小3	232	100	27	324	683
		小5	224	150	66	313	753
		中2	121	168	557	319	1165
	合計		577	418	650	956	2601
学年 の %	学年	小3	34.0%	14.6%	4.0%	47.4%	100.0%
		小5	29.7%	19.9%	8.8%	41.6%	100.0%
		中2	10.4%	14.4%	47.8%	27.4%	100.0%
	合計		22.2%	16.1%	25.0%	36.8%	100.0%

表 3-2-2　　父学歴 と 親子接触類型 のクロス表

父学歴 の %

		親子接触類型				合計
		母接触型	放任型	結果重視型	交流型	
父学歴	中学	26.6%	16.4%	35.3%	21.7%	100.0%
	高校	22.8%	16.7%	25.2%	35.3%	100.0%
	専門	19.4%	13.8%	27.6%	39.3%	100.0%
	短大	19.5%	13.2%	24.5%	42.8%	100.0%
	大学	21.9%	15.3%	21.0%	41.8%	100.0%
	大学院	15.0%	17.5%	17.5%	50.0%	100.0%
合計		22.3%	15.9%	25.0%	36.8%	100.0%

表 3-2-3　　母学歴 と 親子接触類型 のクロス表

母学歴 の %

		親子接触類型				合計
		母接触型	放任型	結果重視型	交流型	
母学歴	中学	19.0%	22.2%	30.2%	28.6%	100.0%
	高校	23.6%	17.5%	25.7%	33.3%	100.0%
	専門	21.6%	14.9%	23.3%	40.3%	100.0%
	短大	21.7%	13.4%	25.0%	39.9%	100.0%
	大学	17.5%	12.7%	19.8%	50.0%	100.0%
合計		22.1%	16.1%	24.9%	36.9%	100.0%

表 3-2-4　　父職業Aと親子接触類型のクロス表

父職業Aの%

		親子接触類型				合計
		母接触型	放任型	結果重視型	交流型	
父職業A	専・技	17.6%	13.8%	17.0%	51.6%	100.0%
	管理職	21.8%	16.0%	24.7%	37.5%	100.0%
	事務	18.2%	13.9%	27.8%	40.1%	100.0%
	販・サ	29.8%	13.1%	24.0%	33.1%	100.0%
	工運保	22.2%	17.1%	25.9%	34.8%	100.0%
	農林漁	5.9%	23.5%	29.4%	41.2%	100.0%
合計		22.3%	15.7%	25.0%	37.0%	100.0%

表 3-2-5　　母職業Aと親子接触類型のクロス表

母職業Aの%

		親子接触類型				合計
		母接触型	放任型	結果重視型	交流型	
母職業A	専・技	12.8%	14.1%	22.5%	50.7%	100.0%
	管理職	9.5%	4.8%	28.6%	57.1%	100.0%
	事務	23.2%	18.9%	18.3%	39.6%	100.0%
	販・サ	27.6%	12.8%	25.7%	33.9%	100.0%
	工運保	19.5%	11.5%	31.0%	38.1%	100.0%
	農林漁	20.0%	20.0%	40.0%	20.0%	100.0%
	パート	20.8%	18.3%	27.2%	33.7%	100.0%
	無職	25.5%	15.6%	22.2%	36.6%	100.0%
合計		22.1%	16.1%	25.0%	36.8%	100.0%

表 3-2-6　　年収と親子接触類型のクロス表

年収の%

		親子接触類型				合計
		母接触型	放任型	結果重視型	交流型	
年収	～199万	12.9%	25.8%	19.4%	41.9%	100.0%
	200～	27.8%	14.6%	22.2%	35.4%	100.0%
	400～	23.8%	17.2%	21.8%	37.2%	100.0%
	600～	23.5%	13.8%	27.0%	35.7%	100.0%
	800～	18.2%	17.7%	27.7%	36.4%	100.0%
	1000～	15.6%	18.8%	25.9%	39.7%	100.0%
	1500～	17.4%	17.4%	29.0%	36.2%	100.0%
	2000～	31.9%	6.4%	19.1%	42.6%	100.0%
合計		22.1%	16.1%	24.9%	36.9%	100.0%

第４節　親子接触類型と学校的成功の尺度

ここでは、前節までにえられた、親子接触類型と「学校的成功」との関わりについてみていくことにする。

(1)「学校的成功」の尺度と親子接触類型

それでは、親子接触類型と「学校的成功」の尺度との関わりをみてみよう。

類型の代表値として各尺度での平均値を比較する。Leveneの等分散性の検定により等分散を確認したのち、一元配置分散分析を行った（表4-1-1）。分散分析は、グループ平均から推定されるサンプル分散を、グループ内で推定されるサンプル分散と比較することによって、母集団内の複数のグループ平均が等しいという帰無仮説を検定する方法の１つである。表4-1-2は、各尺度での、親子接触類型別の平均値と、Bonferroniの多重比較の有意差（0.05レベル）を示した。

また、各学年段階において、親子接触類型と「学校的成功」の尺度の間には異なった関係があることが予想される。図4-1-1～図4-1-5は、同様にしてえられた親子接触類型ごとの各尺度での学年別平均値を示したものである。最大値と最小値の範囲が広いほど、その類型による学年間での差が大きいことを示す。

「成功―不成功」尺度（図4-1-1）

親子接触類型間で有意差があり、交流型、母接触型、放任型、結果重視型の順に成功度が高い。母接触型と放任型の間、放任型と結果重視型の間には有意差はなく、交流型の成功度の高さが際立つ。中２では交流型のほか結果重視型が高くなり、結果重視型が中２では成功の方に傾いていることになる。

「満足―不満足」尺度（図4-1-2）

母接触型、放任型、交流型、結果重視型の順に満足度が高い。前３類型間では有意差は見られないが、結果重視型のみが不満足の方に大きく傾き、そのため類型間での差が３尺度中一番大きくなっている。親が結果を重視すればするほど、小３、小５の子どもは結果を意識してしまい、たとえ同じ成績であったとしても満足度が下がることになる。中２では類型間での差はあまり見られず、親がどのように接していても不満足度が増す傾向にある。

「関わる―関わらない」尺度（図4-1-3）

親子接触類型間で有意差があり、放任型、交流型、母接触型、結果重視型の順に関わる度合いが大きい。放任型と結果重視型の間には有意差があるが、類型間での差は３尺度中一番小さい。結果重視型の場合、学年間での差が大きく、同じ接し方をしていても小５、中２では関わらない方に傾くことがわかる。

以上、各学年段階において、各尺度での類型に異なる傾向があることがわかった。

表 4-1-1

分散分析

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
成功軸1	ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	13.033	3	4.344	15.634	.000
	ｸﾞﾙｰﾌﾟ内	721.657	2597	.278		
	合計	734.690	2600			
成功軸2	ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	16.395	3	5.465	25.958	.000
	ｸﾞﾙｰﾌﾟ内	546.745	2597	.211		
	合計	563.140	2600			
成功軸3	ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	3.079	3	1.026	5.144	.002
	ｸﾞﾙｰﾌﾟ内	518.125	2597	.200		
	合計	521.204	2600			

表 4-1-2

尺度	親子接触類型	N	平均値	Bonferroniの多重比較での有意差(あり＊) 母接触型	放任型	結果重視型	交流型
成功—不成功	母接触型	577	0.007687			＊	＊
	放任型	418	-0.036111				＊
	結果重視型	650	-0.074622	＊			
	交流型	956	0.098686	＊	＊	＊	
満足—不満足	母接触型	577	0.082069			＊	
	放任型	418	0.049401			＊	
	結果重視型	650	-0.127208	＊	＊		＊
	交流型	956	0.033750			＊	
関わる—関わらない	母接触型	577	0.005562				
	放任型	418	0.053349			＊	
	結果重視型	650	-0.053117		＊		
	交流型	956	0.006498				

図 4-1-1

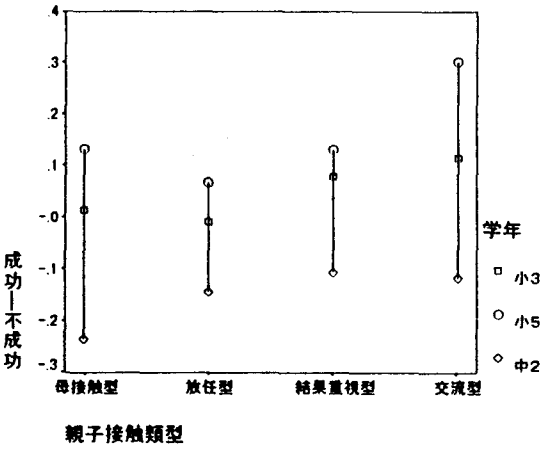


図 4-1-2

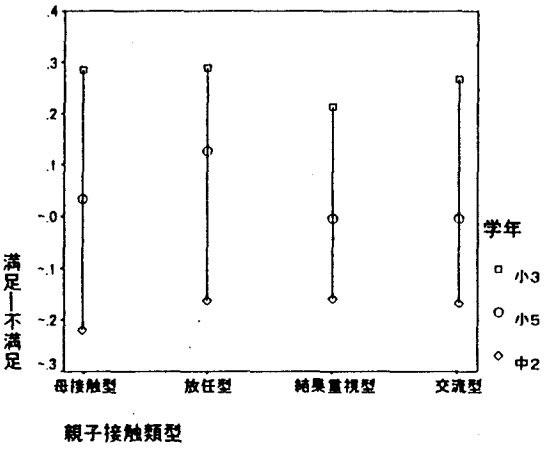


図 4-1-3

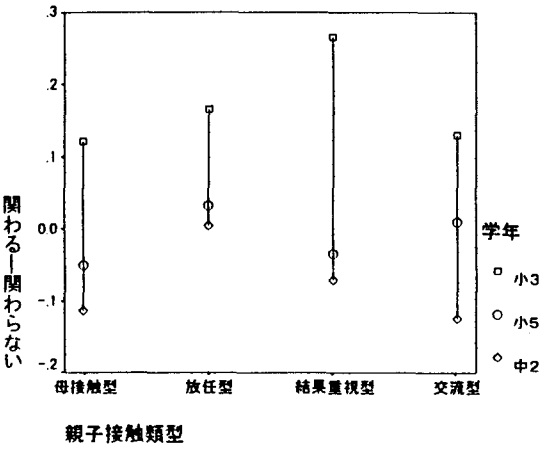


図 4-1-4

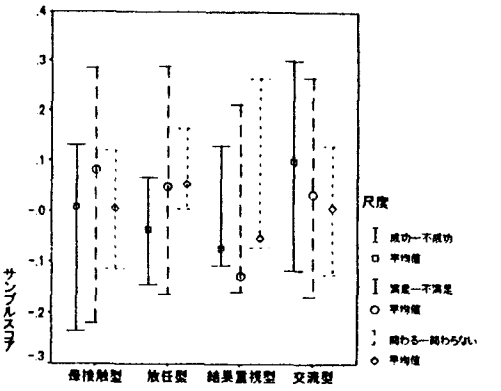
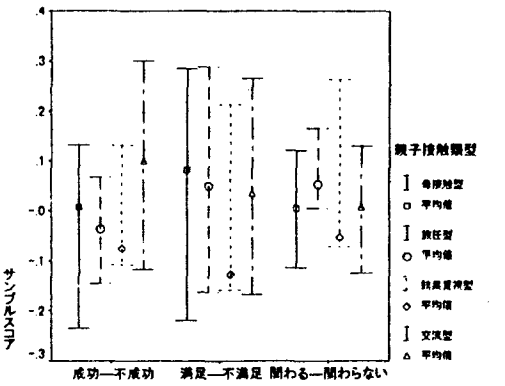


図 4-1-5



(2)親子接触類型がもつ学年への規定力の違い

また、親子接触類型において、各学年段階と「学校的成功」の尺度の間には異なった関係があることが予想される。そこで、親子接触類型ごとに「学校的成功」の３つの尺度を用いて学年を判別する判別分析を試みた。判別分析は、各ケースの観測された特性に基づき所属グループの予測モデルを構築する場合に使われる手法であり、グループ間で最良の判別を行う予測変数の線型結合をもとに判別関数が生成される。この各尺度におけるサンプルスコアを用いて得られた判別関数の当てはまりの良さを、学年と親子接触類型との関係を分析するのに利用する。

表4-2-1はその結果得られた固有値である。この値は判別関数の当てはまりの良さを示すものである。今回は学年を判別する分析であるため、親子接触類型が持つ学年差を説明する説明力の大きさを表わすこととなる。この値は尺度に対しプラスに働くという意味での規定力ではなく、学年に対して一貫して働くという意味での規定力をさす。つまり、全体での値が大きいほど、学年差をこえて一貫して働く規定力を持つ戦略であるということになる。

学年での変化を見てみると、親子接触の影響は小５で下がり、中２で再び影響を受けるようになることがわかる。小３では同じ大きさの影響を与える母接触型と交流型であるが、中２ではわずかながら交流型の方が規定力を持つ。母接触型と交流型との差は父親の対応にあることから、中学段階では母だけでなく父の影響をより受けるようになるということが予想される。全体を通してみてみると、交流型が一番規定力をもち、結果重視型は規定力を持たないということがわかる。

表 4-2-1

固有値

	親子接触類型			
学年	母接触型	放任型	結果重視型	交流型
小3	0.217	0.123	0.053	0.217
小5	0.061	0.033	0.028	0.074
中2	0.231	0.204	0.067	0.295
全体	0.308	0.234	0.078	0.336

(3)親子接触類型と「学校的成功」

以上より明らかとなった、親子接触類型と「学校的成功」の関係をまとめてみよう。

相対的低収入層に多く見られた母接触型は、「成功―不成功」尺度、「関わる―関わらない」尺度にはあまり影響を与えない。「満足―不満足」尺度に対しては、高学年になるほど不満足度が増す方に影響する。

各層にある程度の割合で存在した放任型では、「関わる―関わらない」尺度で学年を問わず関わる方に影響を与える。

低学歴層に多く見られた結果重視型は、すべての尺度において否定的な影響を与える。ただし、この戦略は学年をこえて規定力を持つわけではない。

高学歴高収入層に多く見られた交流型の場合、すべての尺度で肯定的にとらえる傾向があり、とくに成績の善し悪しをはかる「成功―不成功」尺度で成功度が増す方に影響する。

学年により傾向は異なるとはいえ、親の教育戦略はそれぞれ子どもの学校的成功の尺度に影響を与えている。しかも、その背後には特定の階層に特定の戦略が属しているといった状況がある。したがって、子どもが学校でどのような成功を手にできるのかといった問題は、階層間での格差を見落として語るべきではないことになる。

第5節　まとめ

本稿で明らかになったことは2点ある。

まず、子どもの「学校的成功」のあり方は一つではないということである。学歴社会において、学校的成功はすなわち「成功―不成功」尺度、成績の良し悪しとしてはかられがちだが、「満足―不満足」尺度、つまり本人が自分のあり方をうけいれているかどうかという自己肯定感の問題として、そして、「関わる―かかわらない」尺度、つまり学校に関わることができるかどうかといった問題としても語りうるのである。そして、その尺度がどれだけ影響を与えるかは、学年によってかわってくる。学校的成功に対する学年の影響は、親の教育戦略の影響より大きく、どの尺度でも、小3では肯定的に中2では否定的にとらえる者が多かった。これは、学校的成功に対する学校教育のもつ影響の大きさを示している。したがって、学年を増すにつれ成功しにくくなる学校教育のあり方自体をも問い直す必要があるのではないだろうか。

もう一点。親の教育戦略には、交流型のように学年で一貫して規定力を持ちつづけるものと、結果重視型のように学年で異なった規定力をもつものとがみられた。また、成功の尺度に好影響を与える戦略と、そうではない戦略との違いもあった。そして、その戦略の背後には、学歴、職業、収入といった階層間の違いがあることも明らかとなった。親の教育戦略は無意識的な日常的性向に支えられているものであるがゆえに、変化しにくいことを考えると、親の教育戦略に規定された学校的成功の階層間格差は、学年の変化の中で維持され強化されていくことが考えられる。階層が上位の親が交流型の戦略を取り続ける場合、その子どもの「学校的成功」に対して正の影響を与えつづけることとなる。ここに学校的成功の階層間格差が固定するメカニズムの一端が明らかとなったのではないだろうか。